

「目を覚ましている僕」

2023年08月02日

主は言われた。「主人から、時に応じて穀物を配分するようにと、召使たちを任された忠実で賢い管理人は、一体誰であろうか。主人が帰って来たとき、そのように働いているのを見られる僕は幸いである。確かに言うておくが、主人は彼に全財産を任せるに違いない。しかし、もしその僕が、主人の帰りが遅れると思ひ、男女の召使を叩いたり、食べたり飲んだり、酔ったりし始めるならば、その僕の主人は、全く思いもよらない日と時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。」（ルカ12：42～46）

主イエスは、よく「目を覚ましていなさい」と言われた。それは、神が全き裁きを与える終末が来るので、その日に備えて目を覚まし、今を誠実に生きなさいとの勧めである。

主イエスは、一つの譬えを語られた。主人が婚礼の宴会に出かけた。僕たちは主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、迎えられるように、腰に帯を締め、灯をともし、備えていた。「帯を締め」は、働き易いように身を引き締める服装で、「灯をともし」は、夜の帰宅にも対応できる用意である。主人が帰って来た時、目を覚ましているのを見られる僕たちは、食事の席に着かせ給仕してくれる幸いを得る。主人が席に着かせ給仕するのは異例であるが、目を覚ましていた僕が神の国の食事に招かれる幸いを強調した表現である。主人は、盗人がいつやって来るかを知っていたら、みすみす自分の家に忍び込ませたりしない。著者ルカは、主イエスが語られた譬えから、あなたがたも、人の子（主イエス）が思いがけない時に再臨するので、目を覚まし、備えていなさいと忠告している。

ペトロが、この譬えは弟子たちに話しておられるのか、皆のためですかと問うた。主イエスは、ペトロの問いに直接答えず、二つ目の譬えの最後に語っておられる。主人は、時に応じて穀物を配分するように僕に任せて出かけた。主人が帰った時、命令通り、忠実に働いた僕は幸いである。主人は彼に全財産を任せるに違いない。彼は主人の命令に賢く応じたので、財産管理を任される信頼を得る。しかし僕が、主人の帰りは遅れると思ひ、男女の召使たちを叩いたり、食べたり飲んだりして、酔っ払い始めるなら、主人は思いもかけない日と時に帰って来て、命令に不忠実であった僕を厳しく罰する。主人がいなかったことをよいことにし、召し使いたちを乱暴に扱い、飲めや歌えの享楽に走った僕は、手痛い裁きを受ける。主人の命令を知らずに打たれるような働きをした者は、叩かれても少しで済む。主人の命令を知った者と知らなかった者では、罰は異なると言われた。

そして最後に、「すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、さらに多く要求される」と言われた。この言葉が、ペトロの問いに対する答えである。民衆は、終末の裁きについてよくは知らない。しかし弟子たちは、主イエスに聞かせられ、知っている。多くを知らされた者は多くの責任を負い、多くの働きが求められる。あなたがたは他の人々より多く求められると、弟子たちの働きの重要さを語られている。

世の終わりが来るという終末信仰は、人間の知恵、常識からは愚かで、受け入れ難い。しかし、神が初めに天地とそこにある全てを創造されたので、完成に終わりをもちますという信仰は当然である。著者ルカは、終末が遅延し、疑いが増す当時の教会に対し、終末に備え、目を覚ましていなさいと強調している。苦悩と悲慘に満ちた現実を生きる時、全き救いの終わりを信じるから、今を、楽観的に、希望を持って生きることができる。終末の望みが、どんなに破れていても、誠実に生きることが可能なのである。